

## 点検・評価の自己完結ではなく、 点検・評価を改善につなぐ

大学評価室長 児美川孝一郎 1

## 2014年度 法政大学スーパーグローバル大学 創成支援事業に関する大学評価報告書(外部評価)

2~3

## シリーズ「学士力の質保証を考える」対談(第8回): 世界に通用するトップクラスの人材育成を目指して

大学評価室長 児美川孝一郎 × 情報科学部長 雪田修一 4

## 保護者アンケートの結果から 5

## 活動報告／編集後記 6



大学評価室長  
児美川 孝一郎

### MESSAGE 1

## 点検・評価の自己完結ではなく、 点検・評価を改善につなぐ

本年4月より、大学評価室長を仰せつかりました。これまでの自己点検・評価活動の実績を継承しつつ、さらなる充実と発展に努めていく所存ですので、よろしく願いいたします。

さて、僭越ではありますが、個人的な見立てを申し述べます。本学の自己点検・評価の現状を大胆に「メタ点検」すれば、2012年に受審した認証評価への対応を契機として、点検・評価の体制は、精緻なシステムとして整備されてきましたが、そこでは点検と評価が、ややもすると自己完結的に循環してしまっている、ということにならないでしょうか。つまり、点検・評価が具体的な教育・研究の改善にどうつながっているのか見えにくいということです。

こうした見立てが、私の勝手な思い込みや杞憂であることを切に望みますが、はたしてそうなのかどうか、その判断は各学部や研究科等に委ねます。ただ、少なくとも今後の大学評価室の役割には、点検・評価の活動を「点検のための点検」「評価のための評価」にしてしまうことなく、各教学単位の具体的な教育・研究の改善につなげていく道筋を「見える化」という課題があると考えています。要は、点検・評価と教育・研究改善のサイクルが回るようにすることですが、それは、本学の自己点検・評価活動が、これまでの実績を踏まえつつ「一皮むける」ことにもつながりましょう。大学評価室としても、努力を惜しまない覚悟でいます。

# 2014年度 法政大学スーパーグローバル大学 創成支援事業に関する大学評価報告書（外部評価）

大学評価委員会経営部会によるスーパーグローバル大学創成支援事業に関する外部評価結果から

2014年度に本学が採択を受け、取り組みを進めているスーパーグローバル大学創成支援事業について、大学評価委員会経営部会（外部学識経験者4名で構成）による外部評価を行い、大学評価報告書にまとめました。評価にあたっては、本学グローバル戦略本部から提出された資料ならびに同本部関係者とのインタビューに基づき行いました。

同報告書より一部抜粋して掲載します（全文は大学評価室ホームページに掲載しています）。

## 観点別評価

以下の観点は、SGU事業を評価するための量的指標として、文部科学省が構想調書の段階で記載を求めているもので、事業の成果を客観的に知るための重要な目安になっている。現段階では、評価というよりは、掲げている数値目標を参考に、各観点ごとの準備状況及び留意点について所見を述べることにした。

### 1. 国際化関連

#### (1) 多様性

ダイバーシティ化委員会をいち早く立ち上げ、性別・国籍・文化・キャリア・学歴・言語等、様々な属性をもつ教員を積極的に採用しようとする姿勢は、大いに評価できる。アジア系の留学生が増える中で、外国人教職員の役割は益々増大することを考えると、ダイバーシティ化委員会の役割は大きい。女性教職員の拡大に実績のある貴学にとっては、いずれの指標の数値目標も十分達成可能なものであると考える。

#### (2) 流動性

留学生の増加を図ることは、大学のグローバル化にとって不可欠な要件である。二期に亘る「留学生増加プロジェクト」による各種の留学生増加策の効果で、着実に留学生が増えてきているが、願わくば大学間協定の実質化によって、ダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリーを付与できるような進化した大学間交流の推進を期待したい。それにも増して重要な課題は、日本人学生に国際的な体験を積ませることである。内向きと言われる日本人学生が海外に目を向けるための様々なプログラムが用意されている点は大いに評価できる。特に、国際ボランティアや国際インターンシップを「グローバル・オープン科目群」としての単位化を準備している点は注目に値する。

#### (3) 留学生支援体制

留学希望者を増やすためには、語学力の向上と並んで、奨学金等の支援を行うことであり、海外体験に伴う修学上・生活上の不安を軽減することが重要な課題である。そのためには、普段から外国人学生との交流の機会を増やし、彼らの生活習慣や考え方を学ぶ機会を増やす必要がある。また、外国の留学生に対しても、日本での学生生活が快適に過ごせるようなサポート体制の強化が求められる。この点の準備も着実に進められている。

#### (4) 語学力関係

外国の学生の修学を円滑に行わせるためには、外国語、特に国際語となっている英語による授業や研究指導が可能な教員の語学力の向上が重要である。各学部・研究科で、グローバルと銘打った教育プログラムが用意されているが、全ての学部・研究科において、最低1つはグローバルプログラムを用意する必要がある。それと同時に、日本語教育を充実させ、外国人に日本の理解を促すようなプログラムも整備する必要がある。既にその準備は着実に整えられている。何よりも増して重要なことは、日本人学生の英語能力の向上である。10年以内に、半数近くの学生にCEFR B1（TOEFL®500相当）をクリアさせるという目標を達成するためには、これまで以上に、あらゆる方策を総動員して語学力の向上を図る努力が必要であろう。

#### (5) 教務システムの国際通用性

国際的通用性のある教育を展開するには、国際基準にあった教育プログラムの編成と授業科目のナンバリングを行い、全ての授業について英語でのシラバスを整備することが必要である。留学生にとって重要な情報は、何が学べるのかであり、それがどの程度の水準にあるのかが事前に分かることが大切である。試験方法や成績評価の方法、予習のための手引きの事前配布などは、教育の国際的通用性を維持する上での必須事項である。可及的速やかに準備されることを期待したい。学位の質を維持するためには、教育目標の明確化と学ぶことによって学生が獲得できる「コンピテンシー（能力）」を具体的に示すことのできる教育プログラムを整備することである。これからは、「教えたいことを教える教育」から「教えなければならないことを教える教育」への転換が求められている。

#### (6) 大学の国際開放度

クォーター制の導入は、多くの国で実施されている。サマー・セッションなど大学の開放を進める仕組みとして、また短期留学を促進する点から見ても、集中学習を可能にする制度として注目されている。しかし、学問分野によってはセメスター制のほうが教育効果が高い場合もある。貴学では併用制が考えられているが、授業時間の見直しも合わせ、最も教育効果が期待できる方法を採用すべきである。入試についても、国際開放を念頭においた国際バカロレア資格取得者に積極的に門戸を開くことが望ましい。海外入試の実施、外国人編入学制度の導入など、検討すべき課題は多いが、準備が整い次第、実施に踏み切ることが求められている。

貴学が積極的に進めている短期留学制度の拡大は、大学の国際開放度を高める方法としては比較的有効である。大学の開放度を高める必須条件は、大学の情報を外国語で発信することである。この点については、特に意を払って欲しい。

## 2. ガバナンス改革関連

### (1) 人事システム

新たな人事評価システムは、統一的な評価基準に基づいて昇進の要件・指標を明確にし、自己申告と所属長による客観的基準に基づく推薦制を導入した点にある。特に、職員の成長段階を三段階に分け、それぞれの成長目標を定めており、目標管理という観点で職員の評価を行う仕組みは、大学の目標と各職員の目標との整合性に留意した人事管理システムとして評価できる。また、グローバルなガバナンスを支える人材養成の一環として職員の語学研修や海外研修を推進することは重要であるが、対象が若手職員に限定されている印象がある。むしろ、管理職などの幹部職員にこそ、海外研修・語学研修を義務づけることが必要であろう。教員の採用及び昇任基準については、これまでの方法を再検討し、グローバル化の時代に相応しい国際的通用性のある人事制度のあり方を検討することが必要である。

### (2) ガバナンス

総長がリーダーシップ機能を十全に果たすためには、それにふさわしい管理運営システムの構築が不可欠である。各部局等に委ねられていた既得権をゼロベースで見直し、これまでの業務組織・業務内容・業務習慣についても、グローバル化に対応できるよう全面的に見直すことが必要である。それに加えて重要な点は、教員中心であった管理運営体制から教職協働型の管理運営体制へ移行させることである。そのためには、職員の専門的職業人としての業務執行能力の向上は勿論、教員の下支え意識の強かった職員の権限を大幅に拡大する必要がある。アメリカの有力大学では、教育課程の編成権は、教員集団ではなく、IRを駆使しながら、専門的能力を有する職員集団が実質的に担っている例もある。

そのためには、構成員、とりわけ教員の意識改革が不可欠である。

## 3. 教育の改革的取組関連

### (1) 教育の質的転換・主体的学習の確保

アクティブ・ラーニングを浸透させるためには、サポート体制やアクティブ・ラーニング施設を整備することも必要だが、学生の授業へのコミットメントを高めることが何よりも重要である。学生の授業評価も、授業内容や授業方法についての評価に留まらず、自らの授業への参加度・関与度を調べる方式に切り替える必要がある。アクティブ・ラーニングには、特に決まった方法があるのではなく、課題解決型やテーマ中心の授業への転換、予習を義務づけた上でのグループ・ディスカッション、実習やフィールド・ワークの重視など、学年や分野によって様々な工夫が考えられる。

### (2) 入試改革

既に貴学では、外国人留学生入試、帰国生入試、さらには、付属高校からの推薦において英語の外部試験での成績を推薦の条件とするなど、英語の重要性を認識した入試方法を採用している。さらに、これまでの入試に加え、英語外部試験利用一般入試、英語外部試験利用自己推薦入試、グローバル体験公募入試など、様々な方式でグローバル化に対応した入試方法を工夫している。近々、大学入試センター試験の抜本的な改革が予定されている。これからは、入学後のフォローアップを丁寧に行い、どの方式が適切であるかどうかを検証し、多岐に亘る入試方法の整理を行うことが必要であろう。

### (3) 柔軟かつ多様なアカデミック・パス

転学科・転学部を柔軟に行える制度や編入学枠の拡大に加え、専門分化した入試方法の見直しなどのほかに、イギリスで高等教育の一元化が進められているように、各種専門学校等の連携、B to Cと呼ばれている企業からの学生受け入れ、標準修業年限枠の撤廃など、多様なアカデミック・パスを可能にするための方策はいろいろと考えられる。学内規程の見直しは勿論、必要があれば法制度の弾力的運用を国に求めることも必要となってくる。開かれた大学に相応しい多様なアカデミック・パスについて、本格的な検討を期待したい。

## まとめと提言

日本人学生の海外体験を促進させるための仕組みはかなり整っている。問題は、学生が用意された仕組みを自己実現のチャンスとして捉え、海外への関心を深めてくれるかどうかである。まず、短期留学を積極的に推奨し、その後、比較的長期の留学と繋げようとする貴学のやり方は、現実的で賢明な方法である。アメリカの大学の学費が高くなってきた今日、アジア系学生の日本への留学希望が増加しているといわれている。この機会に大学情報を多言語で発信し、日本に対する関心を高める努力が重要である。既に貴学では海外の同窓生やOBを活用した「HOSEI MEETING」が展開されている。現地の若者に貴学を身近に感じさせることのできる貴重な場であると言える。有力なOBを抱えている貴学のアドバンテージを最大限活用すべきである。

留学生の獲得に成功している国際基督教大学や国際教養大学は、かなりの教員が外国籍であるという点に加え、編成されている教育プログラムが、ディシプリン中心ではなく、イシュー中心のプログラムになっている点が特徴である。両大学とも、学士課程教育に中心を置いているせいもあるが、海外の学士課程の学生にとっては、問題中心の教育課程への興味が留学希望の決め手になりつつある。貴学が目指しているサステナブル・プログラムは、ディシプリンではなく、明らかにイシュー型のプログラムである。また、日本発の特色ある教育活動を展開しようとするれば、既存のディシプリンを超えたものになることが予想される。都市型大規模大学が部局を超えた特徴ある教育プログラムを編成するためには、場合によっては、学士課程全体の教育プログラムを全てイシュー型に再編成することを考えてもよいと思う。

## シリーズ「学士力の質保証を考える」対談（第8回）： 世界に通用するトップクラスの人材育成を 目指して

児美川 孝一郎 [大学評価室長] × 雪田 修一 [情報科学部長]

各学部における教育の質保証に向けた取り組み・成果について、大学評価室長と学部長との対談形式でお伝えするシリーズ。今回は、国際標準の教育課程とそれに対応するユニークな学習指導を展開する情報科学部の雪田修一学部長にお話を伺いました。

### ✦国際標準の教育課程と3段階のカリキュラム改革

**児美川** 2000年度開設の情報科学部は今年15年目を迎えます。国際的な教育を目指し、その一環として多くの外国人教員を擁しつつ特色ある教育を行っていますが、節目を迎えてお考えをお聞かせください。



雪田情報科学部長

**雪田** 設置当初に約半数在籍した外国人教員は、人員入れ替えで3分の1程度になりましたが、教員公募では常に「国際的に第一線で活躍されている方」を基準にしており、たとえばISO関連委員会、国際学会の若手リーダーを採用しております。このように教員の国際性という点で高水準を維持しており、国際的な教育を目指している点に変わりはありません。

**児美川** カリキュラム改革を行っていらっしゃいますが、どういふ視点で見直してきたのでしょうか。

**雪田** 国際標準や英語環境に順応できない学生が一定程度います。そういった学生をどう支援するかという視点からスタートし、3段階の改革を行いました。特に開設当初はそれぞれ「世界一を目指す」意気込みでカリキュラムを設置しましたから、成績不振者への対応が課題となり、まず2007年度にそのサポートを強化したわけです。その後、2010年度には上位層育成に向けた国際標準IEEE/ACMの導入、2015年度は中間層の学習意欲開発のための改革を行いました。

また、これら改革の適切性を数値分析等で検証する仕組みも導入しました。基礎科目群では、成績評価のための期末試験とは別に、単位認定のためのMastery Test (MT) を1セメスタ2回以上実施していますから、MTの成績と後続の専門科目の成績を相関させる分析で、学生の学習成果を追跡します。

### ✦「学生が主人公」のサポート体制-GBCとRATの組織運営から-

**児美川** ラーニングアウトカムズ検証の仕組みまで整えている点で優れた取り組みですね。学習指導はどうなっていますか。

**雪田** 平成21（2010）年度文部科学省学生支援GP採択を機にガラス箱オフィスアワーセンター（GBC: Glass Box Office Hour Center）を設置し活用しています。専任教員の中からセンター長を置いて相談スタッフの運営を見守るとともに、各教員は週1コマ当番で学生面談を行っています。教員にとっては成績不振学生への指導の場となりますし、就職指導やよろず相談員（臨床心理士）、学生支援スタッフ（SA: Student Assistant）によるピアサポート等がうまく機能しています。学生が自主的に運営する委員会が軌道に乗って

います。

**児美川** GBCにおける指導や学生の人材育成が教育課程と連関している点で、教員にもメリットがありますね。ところで、eポートフォリオやMoodle、Wikiなど様々なITツールを活用されているようです。

**雪田** それが可能なのは、情報科学部のコンピュータ資源を管理している学生有志RAT（Resource Administration Team: <https://rat.cis.k.hosei.ac.jp/>）の功績が大きいと思います。小金井キャンパスの学部領域コンピュータネットワークの管理はすべてRATに任せています。2001年度に発足したチームで、1年次生からリクルートし、学生主体の人材育成がなされています。プロ並みの集団で、総合情報センターが管理するネットワークのセキュリティホールを発見し、感謝されたこともあるんですよ。RATでは、自身が将来企業のエンジニアとして活躍することを視野に入れ、ネットワークユーザーである教職員を“顧客”として対応するよう訓練されています。

### ✦適切な検証と不断の改善・改革

**児美川** 興味深いエピソードです。FDにおいては相互授業参観や学生モニター制度に外部業者を組み入れていますね。

**雪田** 教員以外の第三者的な視点を入れたいということで始めました。授業参観は他教員と業者とで参観・レビュー・ビデオ撮影し、授業担当教員はそれを振り返ることで自らの気づきを得ています。学生モニター制度では、学生が業者に忌憚のない意見を述べる



児美川大学評価室長

ことが可能です。何事も結果を検証し、課題があれば、個人を追及するのではなく、システムや周辺環境に問題がないかを検討する。そこに第三者的な視点は必要だと考えています。

学生に関する検証では自宅学習時間の確保が最重要です。国際標準カリキュラムでは課題をこなすことが重要ですが、教員が高水準を求めすぎることがあり、学生の学習意欲の低減と成績不振につながるからです。

**児美川** 最後に学部への思い、学生へのメッセージはありますか。

**雪田** 情報科学部には、若手教員のアイデアを迅速に汲み取り実行していく学部であり続けてほしいですね。学生に対しては、世界水準の指導を受けていることに気づいてほしい。将来、優れたエンジニアを目指す上で、それは、よるこび以外の何物でもないと思います。

**児美川** 学部の優れた取り組みがわかりました。本日はありがとうございました。

# 保護者アンケートの結果から

経年変化を中心に

大学評価室では、2014年11月から2014年12月にかけて学部学生の保護者2000名を対象にアンケート調査を実施しました。今回は553名（回収率約28%）の保護者の皆様からご回答を頂きました。その結果を、経年比較を中心に、抜粋して紹介します。

法政大学への満足度は83.9%  
(前年比0.4ポイント上昇)

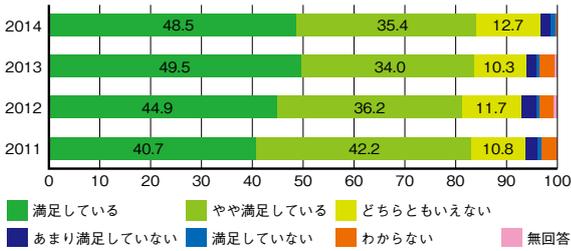
入学学部への満足度は74.7%  
(前年比0.4ポイント上昇)

本学が今後充実すべき点として、「就職支援」・「就職に関する情報の発信強化」をはじめ、「英語教育」「専門教育」「教養教育」「キャリア教育」に高い関心。

6割が「法政大学を勧めたい」と回答。

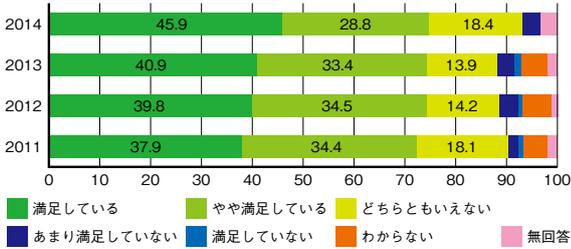
## I 法政大学および入学学部に対する満足度

図1：法政大学に対する満足度（%）



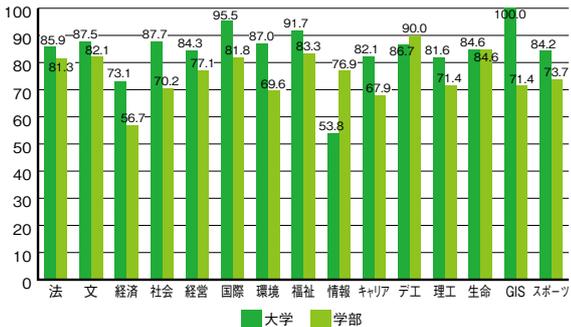
法政大学に対する満足度（「満足している」＋「やや満足している」の割合。以下同様に表記）は83.9%（前年比＋0.4ポイント）でした。

図2：学部に対する満足度（%）



入学学部に対する満足度は74.7%（前年比＋0.4ポイント）となりました。「満足している」の比率は前年と比較して5.0ポイント上昇しています。

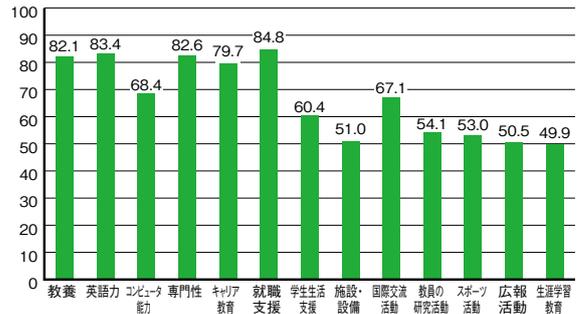
図3：大学・学部満足度の学部別比較（%）



大学満足度は、15学部中13学部が8割を超えています。

## II 本学が今後さらに充実すべき点

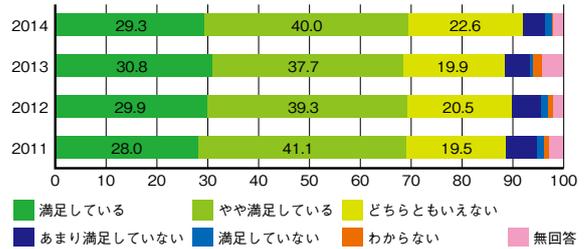
図4：本学が今後さらに充実すべき点（回答数）（%）



特に「就職支援」「英語教育」「専門教育」「教養教育」「キャリア教育」の充実が強く求められています。

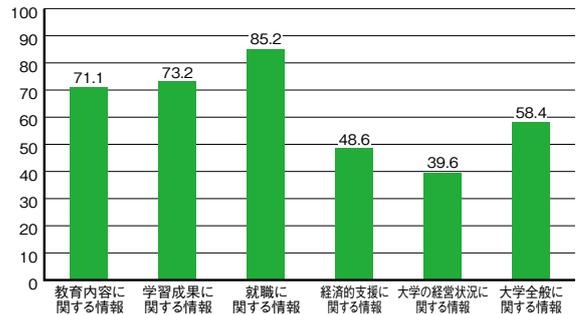
## III 情報提供について

図5：情報提供の満足度（%）



約7割（69.3%）の方が満足と回答しています。

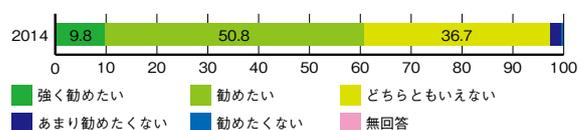
図6：さらなる発信を望む情報（回答数）（%）



「就職に関する情報」を求める声は8割を超え、「教育内容」「学習成果」に関する情報についても7割を超えています。

## IV 法政大学を勧めたいと思うか

図7：法政大学を勧めたいか（%）



6割（60.6%）の方が勧めたいと回答。

アンケート調査の詳細については、大学評価室までお問い合わせ願います。



## 第3回自己点検懇談会（事務部門）を開催しました。

2015年3月16日（月）に、事務部門の自己点検懇談会を開催しました。発表部局ごとに推奨テーマを設定し、各部局の内部質保証の取り組みや、ステークホルダーの満足度向上のための施策等の提案などについて発表いただきました。事務部門の自己点検懇談会としては3年ぶりの開催となりましたが、70名を超える参加者があり、参加者の満足度も非常に高いものとなりました。

## 2015年度自己点検説明会を開催しました。

2015年3月19日（木）に、学部長・研究科長・教育開発支援機構長を対象とした2015年度自己点検説明会を開催し、実質的な2015年度の自己点検・評価活動がスタートしました。

## 第1回自己点検委員会を開催しました。

2015年4月16日（木）に、2015年度第1回目となる自己点検委員会が開催され、2015年度自己点検・評価活動の方針および規程の改正などが審議されました。



自己点検委員会の様子

## 第17回大学評価室セミナーを開催しました。

2015年4月16日（木）に、大学評価室セミナーを開催しました。今回は「あらためて、何のための自己点検・評価なのか—大学全体のビジョンを見すえて—」をテーマに、児美川大学評価室長からテーマ設定の趣旨とねらいについてお話いただいたのち、田中総長にご講演いただきました。田中総長のご講演では、これからの法政大学の方向性や各部局等での個別改革の方向性、実質的な改善につなげるための自己点検・評価の重要性などが示されました。また、講演後は、ディスカッションの場が設けられ、活発な意見交換が行われました。参加者にとっては、大学全体のビジョンの概要が示されたことにより、自己点検・評価活動における自部局の目標を設定するうえでも大変有意義なものとなりました。



田中総長の講演

## <今後のアンケート実施予定>

### 新入生アンケート

学部・大学院の新入生を対象に6～7月にかけて実施を予定しています。

### 法政大学卒業生大学評価アンケート

卒業後3年及び10年を経過した学部卒業生を対象に7～9月にかけて実施を予定しています。



4月より大学評価室長が交代となり、大学評価室長として児美川教授（キャリアデザイン学部）が着任されました。児美川大学評価室長の巻頭メッセージにおいて、今後の大学評価室の役割と本学の自己点検・評価活動において言及がされておりますが、2015年度の自己点検・評価活動を進める中で意識していきたいと思っております。（坂本）

